

研究の背景と目的

中心市街地の近代化と均質化・・・

- 現在(11.4.12.24)、中心市街地活性化法を提出している市区町村は全国に552あります。これは共通の問題を抱えた「まち」が日本中にはこれだけあると言う事です。つまり高度経済成長の時代に地方都市は、流動性を良くするために「近代化・均質化」を目指してきました。そして、今や日本の主だった地方都市は都市スケールの差をのぞけば、東京や大阪と言った都市と基本的には区別することが出来ない「無個性な街並み」になっています。
- これらは目に見えるモノだけの問題ではなく、その土地の自然環境や歴史の過程などにおいて、明確な独自性を持っているはずの地域文化が、ある単一の価値のもとに出来たシステムに集約する事につながっております。

文化や個性の衰退・・・

歴史的遺産の選定基準の変化・・・

- ①由緒、由来のある建造物
- ②時代の生活を伝える建造物
- ③古い建築様式を伝える建造物

客観的根拠に基づいた選定

- ④情緒ある建造物

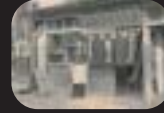
曖昧な基準に基づいた選定

地域の人々や多くの人々が親しみや懐かしさを感じさせる歴史的な建物を、特別な由緒や立派さがなくとも同じように評価するという動き

※歴史的遺産の選定・活用とまちづくり 大野真澄 氏 氏
URL: http://www.kaiji.com/contents/02010231.html より

中心市街地とは・・・

- 多くの人がすむところ
- 商店等が集積するところ
- 多くの人が働くところ
- 様々な施設が集積しているところ
- 広域から人が集まるところ
- 情報を発信するところ
- 歴史や文化があるところ



中心市街地は古くからの商業、業務などをはじめ様々な機能が集まり、人々の生活、娯楽そして交流の場であり、長い歴史の中でもそのまち固有の文化や伝統を育むなど、そのまちの本来

であったはずですが。しかし現在「まち」、特に地方都市における中心市街地と言われるところは、それぞれ固有の問題を抱え、そのまちの顔とも言うべき場所が失われつつあります。



以上のように、日本の多くの地方都市が抱えている中心市街地の空洞化の解決の糸口として、**歴史的な視点**をもち、それをどのように現在、そして未来へ**活用**するかを検討することが近代化・均質化をさげる結果となり、個性あるまち、まち本来の姿をつくる事につながると考えられます。そして、歴史的遺産の選定基準の変化からも分かるように、**地域の住民の身近にあって親しまれてきたモノ、つまりその地域の生活や風習と共に生き抜いてきたモノを保存・活用**すると言う動きは、中心市街地の本来の役割を考えるとまちづくりにはより有効かと思われまます。

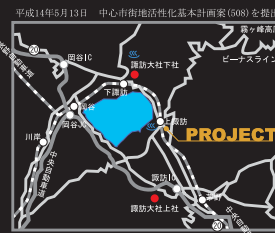
また、これは中心市街地における建築物だけの話ではなく都市の骨格と言うモノにも当てはまると思われまます。そもそも中心市街地は都市基盤が整備しづらい状況から様々な要因を生み出し現在の空洞化へとつながっています。しかし、逆の考え方をしますと、そこには都市の場所や方位など、つまり**都市の骨格とも言うべきものが長く受け継がれて来た**ことを示唆しています。またさらには歴史的建物がある場合はその敷地、区画と言うモノは何らかの歴史的な背景を受け継ぎ、継承してきたと判断する事ができます。そして、このような場所を大規模な再開発する事は、その土地で育まれてきた**文化・歴史の連続性・重層性を切断**することになると考えられます。

地域の選定

敷地の選定条件として次のモノをあげる

- 中心市街地活性化法基本計画を提出している市区町村の中心市街地であること
- その中心市街地にそのまちの歴史・文化を感じられる地区があること
- その地区に保存・活用できそうな歴史的遺産があること
- その歴史的遺産が増改築をよすること

以上の選定条件を満たす敷地として **長野県諏訪市諏訪二丁目地区** を挙げる



- 上諏訪駅中心に発展
- 昭和56年中央高速道路開通 諏訪IC周辺に大型店舗が立地
- 上諏訪駅周辺 商業区域は集客力の低下
- 工場などは地域外や海外へ
- 中心市街地の空洞化

諏訪二丁目地区と電源



舞姫 舞姫商店株式会社



麗人 麗人商店株式会社



横笛 伊豆前道株式会社



電源醸造株式会社

歴史文化地区として指定されている諏訪二丁目地区には横断する甲州街道に沿って約400mの道のりに5軒の造り酒屋が建ち並び、一本路地に入ると風景も一変し、寺社が多く建ち並んでいます。そして、そのちょうど中間地点に醤油・味噌の製造を行っていた電源跡地があります。



本金 酒造の本金酒造株式会社

真澄 真澄醸造株式会社

真澄 真澄醸造株式会社

真澄 真澄醸造株式会社

真澄 真澄醸造株式会社

酒・味噌・醤油はその地域の地場産業として、経済を支え、生活に密着したモノでありまます。そして、それを製造してきた醸造蔵はその地域にズットたたずんできた閉鎖的な空間でしたが、それを転用し、まちづくりの施設として再生することは町に新たな命を創出する可能性をもっていると考えられます。

ここからはクラの現代への可能性とクラのまちづくりへの可能性、そして実例を分析した結果よりプログラムとそれを空間・形態へ表現する方法を抽出しプロジェクトへつなげたいと思います。

クラ・蔵・倉・庫

人がモノと蓄えなくてはならなくなったとき、はじめて「クラ」が誕生した

クラ・蔵・倉・庫

「くら」という字には、蔵・倉・庫と3通りがある。それぞれの意味は・・・

- 蔵—大切なものを蓄いかくす、第一の目的は貯蔵・格納
(宝蔵、御朱印帳、土蔵、味噌蔵、経蔵、酒蔵、藍蔵など)
- 倉—食物を貯める方向の建物
(穀倉、米倉、稲倉、土倉、神倉、官倉、社倉など)
- 庫—文字とおり車を入れておく建物
(車庫、兵庫、金庫、山車庫など)

しかし、今ではこれらの意味は学術的にも使い分けが難しく、混用されている。どの字をどの「くら」に使うかは習慣的な表現の過ぎなくなっている。

※今後、「クラ」と仮名文字で表記する場合は蔵・倉・庫の総称を表しているものとする。

貯蔵蔵



文庫、衣装、座敷、道具などモノをしまう役割で、母屋などは別に造られる。また、初めは何でもモノを収納する建物をクラと呼んでいたが、土塗りの塗籠のクラが出来てからは物置とクラの区別をしている。

店蔵



商人にとって最も重要といえる店を耐火建築とすることで、商品を守る為の建築です。またそれらの建築連続は火に強い町になり、街道沿いは情緒あるモノになっており、町並みを形成している。現在では町並みとして残っているのは小さい町(川越、喜多野など)に多いのは太平洋戦争末期の大空襲により東京・大阪に多かった店蔵は崩壊したからである。

醸造蔵



土蔵は熱遮断と言う性能から新たな方向に利用された。それは酒、味噌、醤油の醸造蔵である。いずれも「発酵」と言う過程を必要とする。蔵は熱を遮断するために内部を一定の気温に保つことメトリックになった。密閉性は高く、蒸らされ、蒸らされた空気を抜くための高窓で常に開放されて、実用本位の産業的なクラな構造となっている。

ステータスとしての土蔵

- 土蔵は買屋から始まった
- 買草として預かったものを火災や盗難から守る為の新種の家屋として登場した
- 金持ち・物持ちの家で作られる
- 焼けては困るものを入れておけば助かる。土蔵は生活の場にはしないので中から火が起ることはない。
- 焼けては困るものをもっている = 金持ちが物持ち

土蔵は豊かさを誇示するステータスシンボル



手法とプログラム

分析対象

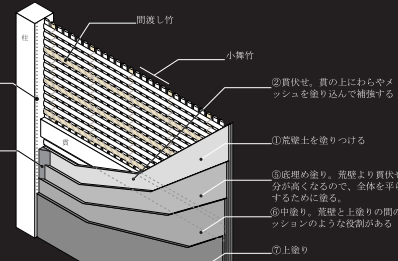
調査・研究対象の建築は「クラ」を改修・活用したモノであり、用途は様々である。これら建物はそのまちで歴史・文化として人と共に時代を重ねてきた建物であり、そして、私が実際に訪れ体験することから、重ねて来た目に見えるモノを様々な工夫をして現代、そして未来へとつなげようとして感じられるものを対象作品とした。よって、有名建築家あるいは建築家すら入っていない作品と言えない偶然出会った建築もあります。このような作品を調査・分析する事からクラを保存・活用する為のプログラムと手法を探求する。



プログラム

- 地域活性化の為の施設
- まちづくりの為の事務所施設
- 歴史・文化地区の核となる施設
- まちを再認識させる施設と空間
- 酒・味噌・醤油を楽しむレストラン
- 体験学習が出来る施設

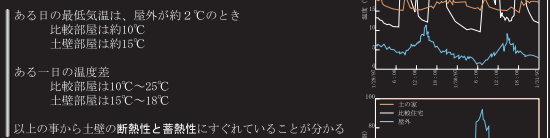
土蔵は左官棟梁



- ① 荒壁土を塗りつける
- ② 貫伏せ。貫の上におろしメッシュを張り込んで補強する
- ③ ちり。細い竹に寒砂を巻きつけ「のれん」を壁の間の柱などに小釘で打ちつける
- ④ ちりまわり塗り。ちり母土や寒砂の層を閉じ、ちりもこぼれず
- ⑤ 庇埋め塗り。荒壁より貫伏せ部分が高くなるので、全体を平らにするために塗る
- ⑥ 中塗り。荒壁と上塗りの間のクッションのような役割がある
- ⑦ 上塗り

「土蔵は左官棟梁」といわれる。土蔵は左官の壁がその出来栄を格を決める仕事であり、土蔵に代わっては大工は棟梁の座をゆずらざるおえなかった。また土蔵では、1年、2年とねかした土壁を掻き終えた小間に荒打ちを終えたところで建前が祝われるということからも「土蔵は左官棟梁」と言われる所以でもある。

右図はマンションの室内(30㎡)を土壁仕上げにリフォームし、同じマンションの階と天井;ビニールクロス、床;絨毯)で、冬期の温度、湿度(相対湿度)の変化を比較したものです。



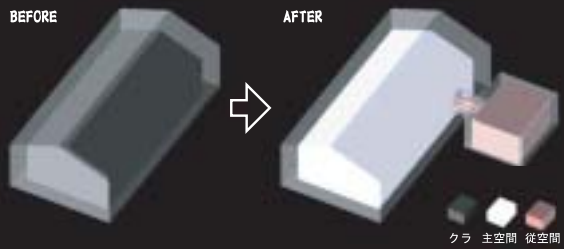
湿度変化からは高い調湿性能が確認できます。湿度が上がると湿度は相対的に上がりますが、外気温が変化しても湿度がほぼ一定していることから、土蔵そのものが自己調湿機能を持っていると言えるでしょう。

断熱性と蓄熱性/自己調湿機能

土蔵の可能性

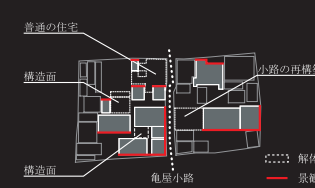
現代の左官職人(久住章、原田進、狭土秀平)は、昔のままの漆喰を塗るのでは今の人には漆喰と理解されない、時代を掴んで表現することをしていきます。彼らは「混ぜる」「塗る」「乾かす」そしてその「自由さ」と「無限性」に見せられ、驚くほどの様々美しい、造形と色を日本のみならず海外にまで表現し主張し続けています。

地域性の素材
町並み形成
景観



クラ本来の空間を生かしながら新しい機能に転用するには新しいプログラムの「主・従」空間を明確にし、そして、その「主」「従」の空間をどのように作るか、あるいはそれらをどのように結ぶか、そしてクラ同士だけではなく、町の中に対してどのように作用していくかを考えた時に敷地内でのクラの再生だけではなく、町の再生へとつながるのです。

積極的な解体



壊すと言う行為は、蔵の場合は積極的な行為になります。蔵を直す際が一番の問題となるのは土の問題です。その当時の土を手に入れるためにも保存する蔵と壊す蔵を判断する事が大切な行為なのです。そして、建築的な面ではスペースを作る事が出来るのでそのスペースをどのように使うかも大切なことである。そして、増築をするにあたり、道沿いの壁面は基本的には現状を補修したり、復元と言う手法をとりまします。それは景観面での配慮からです。そこに増築することが不可能なこともあります。道沿いの景観を昔から作ってきた蔵の壁面を壊さなく残し、蔵を残すだけではなく、その風景までも残すと言う考えからです。

デザインコンセプト

①



既存の空地を中庭空間と
するようにゲートを配置
する。また、レストラン
の従空間である厨房は既
存の板倉に配置する事
により、蔵本来の空間の
まま食事することが出来
きる。

②



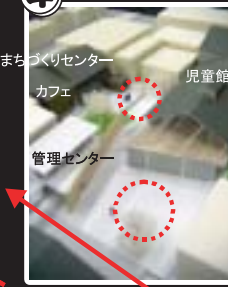
既存の2棟の蔵とその背
後の大きな蔵の間のスペ
ースにガラスボックスを
増築し、この施設のエン
トランスを作る。そして
、この空間は多目的ホ
ールを補佐するホワイエ
空間となる。そのガラス
ボックスは裏道へ続き甲
州街道との関係を築く。

③



裏の駐車場スペースにブ
リッジを増築すること
により人の流れを促す。こ
の空間はギャラリー空間
となります。

④

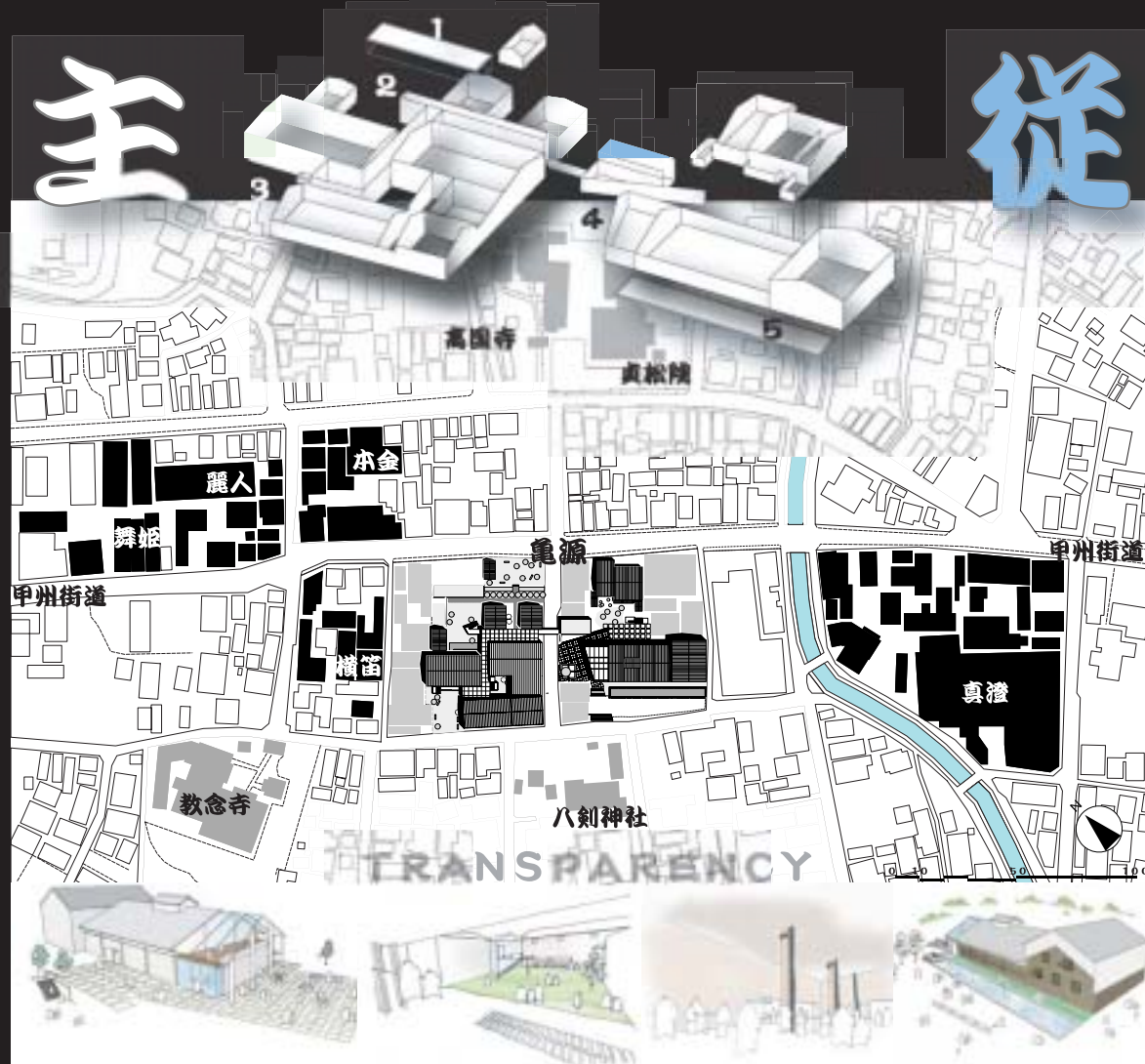


元々ある道に対して蔵を解
体することによりオープ
ンスペースを作り、歴史
のある亀屋小路の再構築
を図る。そして2つの街
区に分かれている施設
を結び空間となり、施
設全体を運営する管理
センターを配置すること
により主空間であるクラ
施設全体をサポートする。

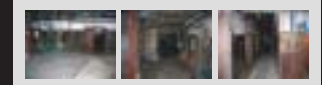
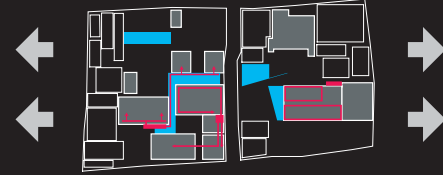
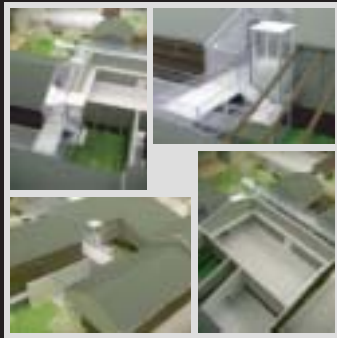
⑤



既存のクラ越しに山並み
が見える景観を保存し
つつ、レベル差のある新
たなスペースに町に流
れている清流を利用した
水盤を増築。そのこと
によりクラとまちとの
新たな関係を築く。



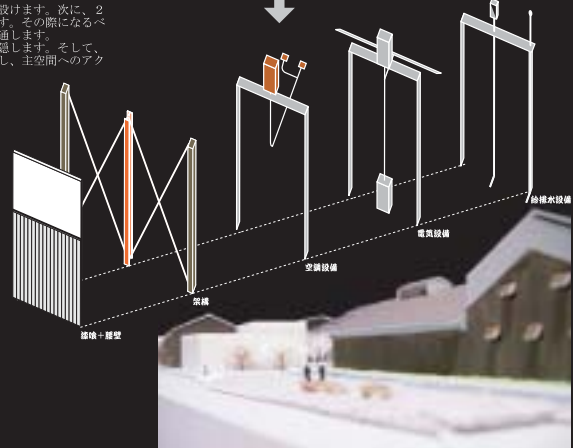
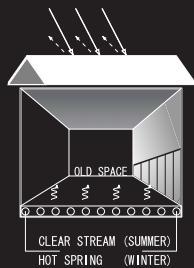
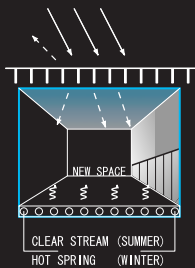
設備計画



現状として構造補強や設備が露出されている

設備は3棟に接しているこの部分に機械室を設けます。次に、2棟が並列している隙間の部分に機械室を設けます。その際になるべく風には通さないで埋塞の際に出来る従空間を造ります。その時に出てくる配管をブリッジで感性的に隠します。そして、そのブリッジは従空間にアクティビティを出し、主空間へのアクセス空間になります。

その事をさけるために次のようなシステムを採用する。土蔵本来の様々なポテンシャルに、現代の生活に適合するような従システムを加え、現代生活に適合する土蔵壁を構築し主空間を充実させる。



図面

クラと鉄筋コンクリートとを比較するなら、クラは大地・農地と同じ土で造られ、力強い木材で構造が組まれ、かつそれが目に見える。けやき、桜、松、杉、楠、檜、などの巨木が大地に根ざして立つ姿を愛好する日本人。温帯の気候により自然の恵みを受けてきた日本人は、自然と共生することを愛する。「クラ」への愛着も、この自然愛に根ざすものからではないだろうか？

また、「クラ」には様々な用途・形態そして現代への可能性が有ります。元来、建物としての主役は主屋であって「クラ」は決して主役をはることはありません。いつも表面に出ることなく、脇役としてかくれるようにひっそりたたずんでいるのが「クラ」でした。

歴史的遺産が活用される過程は様々であります。それらは日常生活の中で活用されることで新たな価値を生み出されます。そして、新たな歴史を刻んで次の世代へと新たな形態と機能を持ってその歴史を伝えていきます。また、それはまちの歴史・文化と共に歩んできたものでもありますから新たな価値を生む際にも周辺環境と共に考え、点から線、あるいは面へと地域的に残すことが、環境や文化を含めて、まちの歴史を伝えることとなるでしょう。

